

「主体的対話的で愛のある学び」

1. はじめに

こんにちは、平田です。

よろしくお願いします。

現在、兵庫県豊岡市にある、兵庫県立芸術文化観光専門職大学の学長をしています。この大学は、日本で初めて演劇やダンスの実技が本格的に学べる公立大学で、全国から優秀な学生が集まっています。本業は劇作家、演出家で作品をつくるのが一番の仕事です。2002年に日韓共同で作った『その河をこえて、五月』、世界15か国語に翻訳されて上演されている『東京ノート』、小説『幕が上がる』の作者です。

前提としてお話ししておきますと、日本以外の先進国は、少なくとも高校の選択必修科目に演劇があります。日本では音楽・美術・書道・工芸ですが、多くの国は書道はないので音楽・美術・演劇から選ぶわけです。音楽の先生や美術の先生と同じように演劇の先生がいる、演劇の先生がいるから国立大学にも演劇学部があるというサイクルがあります。日本だけはこれがなくて、お隣の韓国も、8年ほど前に全ての高校に演劇の授業を入れました。台湾やシンガポールも多くの高校が演劇のカリキュラムを持っているので、日本はアジアの中でも後れを取っています。ちなみにOECDの40数か国の中でも演劇科目のない国は日本を含めて3か国だけです。よく、なぜ演劇教育なんですかと聞かれますが、むしろなぜ演劇やらないんですかと聞きたいです。ですから特殊な事例をやっているわけではないということです。

私自身は、小学校中学校の国語の教科書を作るお手伝いをしてきたので、今もだいたい全国の小中学校、年間30校から40校くらいで実際に授業をしています。私が今暮ら

している兵庫県豊岡市は、市内31のすべての小中学校で演劇教育が導入されています。兵庫県内で言うと、宝塚市もすべての小学校で演劇教育が導入されています。ですから徐々に当たり前になりつつあるということですね。文科省にも次の指導要領の改訂では、何らかの形で演劇という文言を入れることを検討していただいているところです。

今日の演題を「主体的対話的で愛のある学び」とさせていただいたのですが、先生方はご承知のように、今回の学習指導要領の改訂で「主体的対話的で深い学び」ということが繰り返し言われているわけです。主体的という言葉はよく使いますが、対話的とはあまり使われません。今回の学習指導要領ができるまでは、対話的という日本語はなかったと思います。それから、主体的と対話的とは相反するのではないかと思いますし、そもそも深い学びって何だろうと思います。まずはこれについて考えます。

対話的って何かと思って英訳にかけてみたら「interruptive」と出てきます。念のためこれをもう一度和訳にかけてみたら、片仮名で「インタラクティブ」と出てきました。英語の先生にはおわかりのように、「インタラクティブ」を和訳すると「対話的」とは絶対に出てこない。インタラクティブは通常、双方向的と訳します。これはものすごく象徴的だと思います。双方向的なら対話的なのかということです。

今回の学習指導要領改訂で教科書も全部様変わりしました。会話文がたくさん増えました。でも私たち劇作家から見たら、散文で書けばいいことをただ会話に落とし込んでいるだけのような教科書がたくさんあります。私は対話ということはずっと言ってきたので、もちろんこの学習指導要領改訂には肯定的ですが、そもそも文科省は対話とは何かということをきちんと定義するべきではないでしょうか。

特に国語の先生方はご承知のように、共通テストの思考問題は会話文が出ましたが、ひどい文章ばかりでした。通常共通テストのような大きな試験には、国語では必ず名文を扱います。名文について批評とか解釈をするわけですが、会話文は適当に出題者

が書いた文が載っていました。私たち劇作家からすれば、会話文を甘く見るなよと思います。誰でも書けるものではありません。これについてもまた後でお話しします。

2. 国語科教材として作ったスキットによる演劇の授業－嘘をついてもいいよ

まず、どんな授業をしているかご紹介しますが、これは2002年に採択された三省堂の国語教科書に今も載っているスキットです。教科書を作るのにはだいたい3、4年かかるので、たぶん98年ぐらいに最初の依頼を受けたと思います。当時私はまだ30代半ばで、大学教員でもなく一介の劇作家、演出家で、高校演劇の指導は時々していたものの、小中学校ではほとんど授業はしたことがなかったのでできるかなとは思いました。ただお引き受けしたのにはいくつか理由があって、まず劇作家、演出家として社会的責任を果たす意味もあります。

国語教科書からどんどん戯曲がなくなっていて今ほとんどゼロになっています。昔は全部の学年にありました。減るには減るなりの理由があります。まず、やりたいけれど時間が足りない。特に公立だと指導要領の縛りが厳しい。それからコマ数が減っていた時代でしたし、若い先生は自分たちもそういう授業を受けたことがないので、どうやったらいいかわからないまま負のスパイラルに入ってしまったということもあります。それから、教材の側にも問題があったのではないかと思います。私たちの世代で国語の教科書に載っている戯曲の定番というと『夕鶴』でした。『鶴の恩返し』という民話を木下順二先生が『夕鶴』という非常に素晴らしい戯曲に翻案したわけです。

『夕鶴』は美しい架空の方言が使われていて、国語教材としても文学作品としても非常に価値のあるものでした。ただ、今の子どもたちが演じるとして、面白いかどうかというとまた別の話です。だいたい機織りから教えなきゃいけないし、主人公のつうと与ひょう以外は面白くないですね。

みんなが参加できてしかも一人ひとセリフのような悪平等ではない、それからコマ数が少なくてもできる、教室でできる、大道具小道具照明音響一切いらない、そういう

国語教材としてのスキットができないかということで現場の先生方と作ったのがこの教材です。

※朝の教室、生徒たちが登校してくる、教室はワイワイとうるさい。

生徒4　ねえねえ、昨日の××見た？

生徒1　見た見た。

生徒3　見てない。

生徒4　なんだよ。

生徒3　しょうがないじゃんか、オヤジがプロ野球見てたんだから。

生徒1　ダセー。

生徒2　私も見た。

生徒4　すごかったよねー。

生徒2　まさかあそこまでやるとはねえ。

※話はどんどん盛り上がる。そこへ先生がやってくる。

この××にはテレビ番組の名前が入ります。プリントでは最初の登場人物が生徒4になっています。中学生用の教材なのですが、日本の中学生はシャイで、最初が生徒1だと誰も生徒1をやりたいがらないので、生徒4を最初にしておくと、なんとなくじゃんけんで決めてくれるという細かい工夫がなされています。

ここでフィクションとは何かという話をします。「今日の授業は劇を作る授業なので嘘をついてもいいよ。普段授業中に嘘をつく先生や校長先生に怒られるよね。でも今日の授業は劇を作る時間だからうまく嘘をついた子が褒められるよ」と言うと、子どもたちは顔を上げてくれます。そう言わないと、昨日テレビを見てません、という子が一定数いるのです。日本の学校では授業中に嘘をついてはいけないと言われてるので、嘘が書けないのです。もう少し解説すると、日本の学校教育には基本的にクリエイティブな時間というのが極端に少ない。音楽に作曲の単元はありますが、ほとんど実施されていません。図工や美術はデザインが入ってきますが、基本的に写生、写実です。国語は、作文は元より、俳句・短歌でも自分の気持ちを詠みなさいと指導されます。それはそれでいいし間違っていないんですが、それだけだと嘘をついてはいけないというのが、私たち作家にとってはもう息苦しくてたまらない。

私の知人の小説家で『マチネの終わりに』を書いた平野啓一郎さんが、本当に作文が嫌だったと話していました。嘘をついちゃいけないのが何故か全くわからないので、小学4年の時にいじめについての完全にフィクションの作文を書いたそうです。登場人物も全部架空です。それがあまりにもうまく書けていたので、教員は全員本当のことだと思って平野さんのところにかわるがわる来て、「平野、俺にだけは本当のことを言っていぞ」と言ったそうです。でも、嘘の方が面白いし、人を楽しませられるじゃないですか。

かつてPISA調査で、フィンランドがずっと1位2位を占めてフィンランドメソッドが話題になりました。フィンランドの教科書が翻訳されて出版されているのですが、小学4年のある単元に、子どもが学校に行ってから帰ってくるまでの話をお母さんに話して聞かせるという、結構な長文があります。その課題として、この子がお母さんに話している内容で、嘘を言っている部分と大げさに言っている部分とを塗り分けましょうというのがあります。きれいに塗り分けるのが目的ではありません。嘘と大げさの境目は人によって違うということを4年生に教える授業です。僕はこの教材を見た時、こういう教材があったら僕も小学生の時楽だっただろうと思いました。僕は小学生の時

から嘘つきって言われてきたからです。僕は人を楽しませるために盛って話していますが、日本の学校では嘘扱いになります。

皆さんご存じのように、イギリスの特にパブリックスクールでは、中学から修辞学という学問が始まります。これは将来政治家や弁護士などになるエリート層が受ける授業で、スピーチとかディベートなどを習います。政治家や弁護士は嘘についてはいけません、盛って話す能力は必要です。嘘と盛って話すのとをギリギリのところでちゃんと峻別できなければいけません。そのためにフィクションの力をきちんと把握するということだと思います。

私は関西に移って、非常にいいと思ったのは、上沼恵美子さんが、芸人はホラは吹くけど嘘はつかないんだと言っていたことです。人を楽しませるホラはいくらでも吹いていいけど嘘はついちゃいけない、このホラと嘘の区別をつけるのが、これから子どもたちには大事ではないかと思います。

スキットに戻りますが、

生徒3 しょうがないじゃんか、オヤジがプロ野球見てたんだから。

オヤジって出てきます。またここで子どもたちに聞きます。「友達と話すときに自分のお父さんやお母さんのことを何て呼びますか」そうすると父さん母さん、パパママいろいろ出てきます。それで、「これ替えていいよ、オヤジってなってるけどお父さんでもいいし、嘘でもいいってさっき言ったわけだから、父上でもパピーでもOKです」と言います。これは1番目のポイントです。

次に普通の授業と違う2番目のポイントで、「滑ると恥ずかしいから気をつけてください」と言います。子どもたちはお笑い大好きなので、ここが一番食いついてくると

ころです。面白いセリフを書くコツは、滑らないギリギリを狙います。中学生の場合、女子はだいたいやってくれますが男子がやってくれるかどうかポイントなので、男子向けに「サッカー好きな子多いよね。サッカーでいいシュートは、ゴールポストのギリギリ狙うでしょ。キーパーの正面を狙いすぎると大外しになるから。つまりウケ狙いは滑るけどチャレンジしないのも面白くないから、滑らないギリギリを狙うんだ。これを自分たちで考えるんだよ」というような話をします。

あとは関西なら語尾を関西弁にするなどして、そこまでできたら一度発表します。

次にこのスキットです。

生徒5 起立、礼。

全員 おはようございます。

先生 おはようございます。

生徒5 着席。

先生 おはよう。えー、今日はまず皆さんに、転校生を紹介します。長野から来た〇〇さんです。

〇〇さん、自己紹介してください。

〇〇 長野から来た〇〇です。父の仕事の都合で、引っ越してきました。東京は初めてなので、よろしくお願いします。

先生 じゃあ、〇〇さんに何か聞きたいことある人？

生徒4 はい。

先生 ××さん。

生徒4 えっと、得意な教科は何ですか？

〇〇 国語と体育です。

生徒3 はい。

先生 △△さん。

生徒3 趣味は何ですか？

生徒2 もっと面白いこと聞けよ。

先生 静かに。

〇〇 えーと、前の学校ではスキー部にいました。

先生 はい、他に？

．．．．．

先生 それじゃあ、先生はいったん職員室に戻ります。〇〇さんは、それじゃあ、
××君の隣に座ってください。

〇〇 はい。（と言って席に着く。）

先生 じゃあ、仲良くな。

生徒たち はい。

先生廊下に退場

生徒3 スキーってうまいの？

〇〇 え、そんなうまくないけど。

生徒2 でも、スキー部だったんでしょう？

〇〇 長野じゃ、みんなやるから。

生徒2 えーでも、きつとうまいよねえ。

生徒3 うん。

〇〇 そんなことないって。

生徒1 （生徒5に）スキーってやったことある？

生徒5 あるよ、2回くらいだけど。

生徒1 え、いいなあ。わたしやったことない。

生徒4 わたしもない。

生徒5 え、じゃあ、3年になったら行こうよ、みんなで。

生徒4 うん。

生徒2 行こう、行こう。

生徒5 〇〇さんに教えてもらえばいいじゃん。

生徒1 そうかそうか。

子どもたちが話しているところに先生が転校生を連れてやってきて、趣味は何ですか
など質問をして、それから先生はいなくなって子どもたちだけで話すという内容で
す。1回やってみると面白いのは、グループによっては内容を変えすぎてしまうところ
があることです。例えば、長野を静岡に変える。そうすると、静岡でも私立ならス

キー部がある学校もあるかもしれませんが、「スキーってうまいの」、「え、そんなうまくないけど」、「でもスキー部だったんでしょ」、「静岡じゃみんなやるから」。ここでみんなが「あれ？」ってなるわけです。こういうグループが1時間目に行くと、教員としてはありがたい。「今ちょっと変だったよね。静岡に変えたチャレンジはよかったけど、ここでみんな『え？』ってなったよね。さっき嘘をついていいと言いました。でも、嘘をついたから褒められるんじゃないんだ。うまく嘘つかないと褒められないんだね。嘘だってすぐばれちゃうから。一つ変えたら全部変えていかなくちゃいけない。リレーのバトンを渡すみたいに言葉のバトンをきちんと渡して行って、受け取った側は自分のセリフも変えていくんだよ」という話をします。

さらに、国語的な要素も入ってきます。例えばスキーをテニスに変えるグループがあったとして、「いいなあ」、「わたしやったことない」、「わたしもない」、「じゃあ3年になったら行こうよ、みんなで」、「うん」、「行こう行こう」。これはどうでしょう。「意味は通じたけどちょっと変だった。行こう行こうってどこに？スキーは『行こう』だけどテニスはたぶん『やろう』の方がしっくりくるよね。こういううちっちゃいところで嘘ってばれちゃうでしょ、だから細かいところをちゃんと変えていくんだよ」と話します。

逆にすごく変えるグループがあります。例えば転校生が宇宙から来た設定にします。「前の学校ではロケット部にいました」、「ロケットってうまいの」、「え、そんなうまくないけど」、「でもロケット部だったんでしょ」、「火星じゃみんなやるから」、という風に、全部ちゃんとつながるんです。そうすると、「あれ変だよ、火星から転校生が来るわけない大嘘なのに、言葉が全部つながってたからみんな普通に聞いているよね。長野からテニスの好きな転校生が来た設定では『行こう行こう』だけで嘘がバレちゃったよね。だから言葉っていうのは、こういう風につなげていけばみんなに信じてもらえるんだよ」と話します。

2時間目は、ワークシートを使って、生徒たちが先生が来るまで何の話をするか、転校生はどこから来たか、転校生の自己紹介、それから転校生にどんな質問をするか、先

生がいなくなった後何の話をするか、全部考えて3時間目に発表します。これだけの授業で3コマで終わります。

公立の小中学校でやっている先生方が何より驚くのは、授業の参加率が非常に高いことです。演劇の授業では、普段作文の書けないような子でも自分のセリフはだいたい自分で書きます。話し言葉で書いていいということになると、知的操作が1段階ハードル下がります。

3. 従来型の国語の授業の概念を変える

この教材を作ったのは20年以上前ですが、まだアクティブラーニングという言葉もなく、批判もありました。一番印象的だったのは、これは授業ではないのではないかと言われたことです。教員の側に教えることが何もないということです。確かにこの教材には、従来型の国語授業のように解釈の余地はないのです。私はずっと、「教えなさい」と言っています。友達と話す時と、先生が来た時と、先生はいなくなったけど転校生というちょっとした他者がいる時とで、子どもたちの話し言葉のモードが少しずつ変わっていきます。その変わり方も一人ひとり違う。先生が来るとすぐ言葉使いの変わる子もいれば、変わらない子もいる。そういうところで話し言葉の多様性や面白さに気がつくというのが、この授業の眼目の一つです。従来型の国語の授業のように、ほら先生が来たんだからそんな言葉使いじゃだめでしょというふうに、先に言語規範を押しつけたら、子どもたちの学びの機会は全くなくなってしまいます。

僕は公教育に入って30年近いですが、当初何より驚いたのは先生方が教えたがることです。教え方も全国一律です。授業で課題が出て生徒が困っていると「ヒント出そうか」と言います。それはヒントじゃなくて先生がやりたいことです。だからみんな同じような発表になってしまう。確かに、特に初等教育においては、教員の方が知識や情報の量において圧倒的な権力性を持っているので、教えていた方が楽です。でもこの表現教育とかコミュニケーション教育とか演劇教育というのは、子どもたちの側か

ら表現が出てくるのを待つ勇気が必要だと思います。でもなかなか待てない。しかも、もちろんぼーっと待っていればいいわけでもない。子どもたちからアイデアが出てくる瞬間なのか、何か助言をしなければいけないのか、この見極めが難しいだろうと思います。

今私が暮らす豊岡市内31のすべての小中学校で、教員がこの授業をやっています。そのために研修に3年かけました。指導主事の先生が私のモデル授業を全部ビデオに撮って編集して、声掛けのタイミングだけで夏休みに1時間研修しました。声掛けのタイミングという、今まではベテラン教員の暗黙知で行われてきたことを、これからは言語化して伝えていく時代になってきたと思います。この7、8年で教員の教えすぎが問題と言われるようになりました。大きく変わってきたと思います。

この授業は2時間目のワークシートの時間がハイライトになります。子どもたちにとっては3時間目の発表がハイライトですが、2時間目にいろいろな要素が詰まっているわけです。私はできるだけ関与しないで机間巡視だけしていますが、当然停滞しているグループがあるので様子を見に行きます。例えば、朝先生と転校生が来るまで何の話をするか決まらないという時に、「何話す？」と聞くとシーンとなるのですが、「今朝何話した？」とか「いつも何話すの？」と問いかけるとだいたいどんな子でも答えます。現実には優等生的な子が「宿題の話をします」とか「運動会が近いので運動会の話をします」と答えてくれて決まっていきます。また、当然しゃべらない子がいます。その子に「君は今朝何してたの？」と聞くと「あ、寝てた」と答える。「いいね、いいね、じゃあ寝てる子の役にしよう」となります。つい三日前の授業では、もっと黙ってる子に聞いたら、「いない」そうなんです。いつも遅刻ギリギリだからいない。「あ、いいじゃん、遅刻して来る役にしようよ」と決まって実際に発表の時は、彼はランドセルをしょって小道具も全部自分で用意して、遅刻して来る役を生き生きと演じました。その子は普段から遅刻の常習犯だったらしくて、彼が場面に出てくるだけでクラスは大爆笑です。彼にとっても大きな喜びなわけですね。遅刻する役を演じるのに適役だというわけで、マイナスをプラスに転嫁できたわけです。みんな

がみんな宿題の話をしているグループよりも、宿題の話をしている子の横で突っ伏して寝てる子もいれば、やばいやばいって言いながら途中から入ってくる子のいるグループの方が演劇としては圧倒的に面白くなります。その時に子どもたちは「しゃべらないことも表現なのか」「いないことも表現かもしれない」と気づいて、表現の概念の幅自体が広がる瞬間があります。

これは従来型の国語の授業からすれば多少逸脱したものです。文科省が定めた国語教育の柱は「読む・書く・聞く・話す」の4つです。「読む・書く・聞く・話す・話さない」ではないし、ましてや「読む・書く・聞く・話す・話さない・いない」となったらこれはもう授業ではない。しかし表現者からすれば「話さない」も「いない」も立派な表現です。

三省堂の国語教科書編集会議で、今言ったことを話したところ、隣に座っていたあまんきみこさんが一番反応して、自分はしゃべれない子だったから、しゃべらない教科書を作りたいと言われました。国語教育に携わると、どうしても子どもにきちんとしゃべらせたい、正しくしゃべらせたい、たくさんしゃべらせたいと思います。当たり前のことだと思います。でもある子どもたちにとっては、それがプレッシャーになってしまうのではないのでしょうか。しゃべらなくてもいい、遅刻してきてもいい、それも表現だよと伝えることで、ある子どもたちには居場所を提供できるのが演劇教育の一つの強みです。

演劇教育をやっていると、コミュニケーション教育とつなげられて、コミュニケーションが苦手な子はどうするんですか、それで不登校になったらどうしますか、というような言いがかりともとれるようなことも言われてきました。でも音楽が苦手な子がいるから音楽をやめましょうとか、絵を描くのが嫌いな子がいるから美術をやめましょうという話にはならない。社会に出る最低限の力をつけて社会に出るのが、義務教育の役割です。コミュニケーション教育も同じです。説明がうまい人を育てるのがコミュニケーション教育ではなくて、訥々とでもいいから自己紹介ができるとか、人の意見がきちんと聞けるとか、いやなことをいやと断れるとかそういうことの方が大事です。

先ほども言ったように、居場所を作りやすいというのが演劇教育では一番の強みです。小学校の先生方には、声の小さい子には無理に大きい声を出させないでいいと指導します。声の小さい子は、声の小さい人の役をやらせるととてもうまいです。「声の小さい人上手だね」って褒めているうちにだんだん声が大きくなるようになって、その役ができなくなるということもあります。実際に場面緘黙の子が活躍したケースもあります。数年前豊岡の小規模小学校でそういう子がいて、みんな保育園から一緒だからその子が家ではしゃべってることは知っているけれど、担任の先生はその子の声を聞いたことがない。劇の授業の1時間目には、周りの子たちがその子でもできるように、手を上げたりうなずいたりする役を作ってあげて、2時間目は何と大胆にも主役の転校生にしたのです。しかもシャイな転校生という設定です。「趣味は何ですか」と聞かれたら、その子は先生役の子に向かってこそこそ言う。先生役の子はとても上手で、「あ、サッカーだそうです。じゃみんな放課後遊んだら」というセリフを言って、全部誘導して問題なく完結するわけです。その子も役を演じきったのでとてもいい笑顔です。普段社会科の研究発表などではなかなか参加できないけれども、劇では役割があり演じられるのが強みだと思います。

4. なぜ演劇の授業が広がってきたか—大学入試改革の視点から

どうしてこういった授業が広がってきたか、いろいろな要素がありますが、少し大学入試改革の視点から話をします。小中学校の先生方にとっては関心が薄いかもしれませんが、後でつながるので聞いてください。

大学入試改革自体は完全に失敗に終わったのですが、その理念からどういった学びが今から必要になってくるのかを考えたいと思います。

文科省は、そもそもセンター試験を廃止して共通テストを施行するにあたって、ごく基礎的な学力を問おうとしました。できれば年に2回も3回も行う資格試験か、アメリカの大学入試に近いものにしようとした先進的な官僚たちは考えていたわけですが、意見が衝突してめちゃくちゃな改革になってしまいました。今も文科省は、大学入試は入

学後の学びの伸びしろ(潜在的学習能力)を測るような試験が望ましいと言っています。潜在的学習能力とは、昔から言われてきた思考力・判断力・表現力です。この10年くらい文科省が学力の3要素と呼んでいる、主体性・多様性・協働性があります。つまり、知識や技能を土台にして、思考力・判断力・表現力を身に付けて、主体性・多様性・協働性を伸ばしましょうということです。共通テストでは、表現力の部分はなくなりましたので思考力ぐらいまでを問うて、残りは大学の個別試験で評価するということですが、主体性と協働性は時に相反しますので、どうやって測るのか大学の入試作問担当者は頭を抱えます。

私は香川県にある四国学院大学の学長特別補佐を長く務め、入試改革担当でした。地方の私立大学ですが、生き残りをかけて8年ぐらい前から新制度の前倒し実施を始めました。どんな問題を出すかも発表しています。

- レゴで巨大な艦船を作る。
- 昨今、小学校での組み体操の危険性が指摘されているが、実際に組み体操をやってみて、その危険度や対策を協議する。
- 小説の一部分を切り取って、小学生向けの紙芝居を作る。
- AKBともいえるクローバーZのダンスを実際に踊ってみて、それぞれのビジネスモデルの違いを討議し、新しいアイドルのプロモーションを考える。
- 四国の観光プロモーションビデオのシナリオを作る。

「レゴで巨大な艦船を作る。」これは10数年前にオックスフォードで実際に出了問題と言われています。8人一組で、作業手順を決めて役割分担し、設計図を書いて実際の地道な作業もいとわず行う、いろいろな能力を見る試験です。ご存じかもしれません

が、数年前に東京の中高一貫校の中学入試で出題されました。さらにすごいと思ったのは、もう翌年からどこかの学習塾がレゴを始めました。

A K BとももいろクローバーZの問題は、私がお手伝いした大阪の高校の教科間連携授業がもとになっています。その時の課題は、A K BとももいろクローバーZと妖怪ウォッチのダンスを実際に踊ってみて、そのビジネスモデルの違いについて考えるというものでした。A K Bは薄く広くCDを売る商法で、みんなのアイドルだから踊りやすいダンスじゃなきゃダメだということ。ももいろクローバーZは、10万人のファンクラブを囲い込んで、ライブで高額グッズを売る応援型育成型商法のアイドルなので、応援したくなるダンスじゃないとダメ。妖怪ウォッチは、子どもが妖怪ウォッチを買うわけじゃないので、お父さんお母さんや、おじいちゃんおばあちゃんが見てかわいく見えるダンスじゃなきゃダメです。

今の子どもたちはダンスが大好きですね。ダンスを踊る高校生に、ダンスの裏にも、大人の醜いビジネスモデルが張りついているということを知らしめる授業で、体育が得意な子にも社会に目を向けるという意味でよくできています。

教科間連携で最近私が感心したのは、福井の進学校での、家庭科と社会科と理科と国語の教科間連携授業です。人工肉の是非についてですが、まず家庭科で調理して実際の肉と食べ比べる。次に理科で成分や遺伝子組み換えなどの違いを学ぶ。次に社会科で経済波及効果とかマーケットの多さなどを、資料で読んだりディスカッションしたりする。最後に国語でグループディスカッションし、ワールドカフェを開催する。これは料理を入れたのがいいですね。

こういった教科間連携の授業も全国に広がっていて、大学入試にも入ってきます。今までの科目ごとの試験ではなく、教科横断的な内容の試験になります。

どんな能力を見るかも発表しています。自分の主張を論理的、具体的に説明できたか、ユニークな発想があったか、というのは主体性を見る視点です。一方でタイムキープを意識し議論をまとめることに貢献したか、地道な作業をいとわずにチーム全体に対して献身的な役割を果たせたか、これは協働性です。

四国学院大学入試で実際に過去に出された問題を、1つだけご紹介します。

以下の題材でディスカッションドラマを作りなさい。

○2030年、日本の財政状況はさらに悪化し、ついに債務不履行(デフォルト)を宣言する直前まで進みました。日本国政府は国際通貨基金(I M F)からの支援を受け入れることとなり、その条件として厳しい財政健全化策をとることとなります。

○I M Fからの要請の一つに、多大な維持費がかかる本四架橋のうち2本を廃止し、1本だけを残すという提案がありました。

○関係各県を代表して、どの橋を残すかを議論するディスカッションドラマを作りなさい。

○登場する県は、香川県、徳島県、愛媛県、兵庫県、岡山県、広島県になります。(6人の班の場合は県を一つ減らしてください)

○他に議長役を一人登場させてください。

四国学院大学はほぼ全入の大学ですが、毎年このレベルの問題を出しています。高校3年生にはちょっと難しいと思われるかもしれませんが、このレベルの問題が出せるのはなぜかという理由を説明します。ちなみにP Cで全面検索可にした日本で最初の大学入試だと思います。

この試験は7人一組で行います。2台のP Cが置かれている別室に案内されます。その日に初めて会った18歳の7人の中で、誰が検索するかいつ検索するか、それで得た情報をどう使うかが問われます。採点する教員の側にルーブリックがあって、非常に細かく採点基準が決まっています。これは検索のうまさが評価されるのではない。もちろん検索のうまさや、検索を買って出た積極性も評価対象になりますが、むし

ろ、「検索うまいね。じゃあ俺メモ取るわ」という風に自分の役割をきちんと担えた受験生が一番高い点がつきます。この試験はディベートではないので、自分の意見を通した子が得するものではありません。全体のパフォーマンスが上がることに貢献したかどうかが問われるのです。ドラマとして面白くしなくてははいけないし、そのためには妥協、裏切り、反撃などを考えなくてははいけないのです。

さて、各県代表のどこが最初に裏切ると思いますか。最初に通行量を検索すると、実は瀬戸大橋と明石海峡大橋はほぼ同じです。ただ、瀬戸大橋だけが鉄道が通っています。だから常識的に考えると、九分九厘瀬戸大橋が残ります。私が住んでいる兵庫県は500万人の大県です。四国全部で400万人しかいないので、私が兵庫県の代表だったら、まず徳島県を切って捨て、「明石海峡大橋だけ残します」とIMFに言います。明石海峡大橋はほかの橋と違って県内の橋です。淡路島は兵庫県なので、兵庫県としてはここだけ残れば痛くも痒くもないです。費用も1/3じゃなく1/6ですみます。さて香川県、愛媛県はピンチです。次に裏切るのは愛媛県だと思えます。愛媛県西条市は、旧国鉄の新幹線の父と呼ばれた十河さんという人の出身地で、四国の人たちは、今も四国新幹線はいつか通ると信じています。新幹線が通ると東京からの移動時間がどのくらい短縮されるかということも、検索すると出てきますが、高松や徳島ではなく、松山が一番短縮されるのです。リニアが大阪まで通って、接続が良ければ3時間台で東京から松山まで行けるようになると言われていています。そうになると飛行機はいらないし、もちろんしまなみ街道もいらなくなります。瀬戸大橋は、新幹線が通ることを前提に広軌で作ってあるので、この瀬戸大橋がなくなったら未来永劫新幹線は四国に通らない。もちろん、財政破綻してるのに新幹線が通るわけないだろうというツッコミもあると思いますが、要するに、こういったことは個別には全部インターネットで情報が得られますが、その情報をつなぐ力を持っているかを評価する試験だということです。

最近流行っている言葉として、コネクティングザドッツといって情報と情報をつないでどうやって物語を作るかが、21世紀後半を生きる子どもたちには必要とされるのではないかということです。

5. これからの大学入試

さて、劇作家の私がなぜこのような仕事をしているかというと、私が勤務していた大阪大学は、相当早い段階から大学入試が変わっていくだろうと予測していました。世界の大学入試が変わっていったという情報が来ていたからです。だったらいっそのこと、日本一ではなく世界最先端の入試を独自に開発していこうという話になりました。大きな補助金が得られたので、大学院の奨学金選抜の試験を使って、先端的な入試を作ってきました。例えば40人をホテルに缶詰めにして、演劇を作る試験とか映画を作る試験です。70年ほど前にノーベル物理学賞をとった朝永振一郎先生が、「光子の裁判」という光の性質を説明する戯曲を書いているのですが、これを8人一組で読んで、スーパーサイエンスハイスクールに制定されている高校1年生を対象に想定し、光の性質を説明する紙芝居を作りなさいという試験もやりました。光の矛盾した二つの性質を、裁判形式で説明した戯曲で、理系には常識ですが文系の子にはこの常識が受け入れられない。理系の子は説明が苦手、文系の子は説明は得意、しかも紙芝居だから絵を描く人も必要、いろいろな能力を持ち寄らないとパフォーマンスが上がらない試験です。こういった問題を私が出題担当として一人で作ってきました。

最初の会議の時、20人ぐらいの入試プロジェクトチームの教員全員に、漫画『宇宙兄弟』を全巻買って読んでもらいました。これはJAXA、NASAの宇宙飛行士を選抜育成するストーリーの漫画です。皆さんが受けてきた受験というのは、その受験の時点での知識や情報の量を測り、何番まで合格、それより下は不合格としたものでした。JAXA、NASAは違います。命のやり取りができるクルーを集めるための試験ですから、先ほど言ったように、いろいろな能力が必要になります。共同体がピンチの時にジョークを言って和ませられるとか、斬新な意見でピンチを切り抜けられるかということです。どんないい意見を言っても日ごろから地道な作業に加わっていないと信用されないということもあります。

日本の大学入試も、こういった仲間を集める試験に変わっていくのではないかと考えられています。ハーバードとかスタンフォードとか、日本でも京都大学とかはコロナ前から授業内容をインターネットで無料公開しています。インターネットの時代に知識や情報は囲い込むものではなく公開するもので、そのほうがさらに知識や情報が広がって蓄積されていくからです。地方の高校生の受験勉強も様変わりです。どこでもいつでもだれでも情報や知識は手に入ります。そのインターネットの世界を前提にして、それでも大学でともに議論し学ぶことが、大学に残された唯一の価値だというのが先端的な大学の基本的な考え方です。何を学ぶかよりも誰と学ぶかが大事になってきます。何を学ぶかは世界共通だから、それよりも誰と学んで、誰とディスカッションして、誰と結論を出していくのが重要になります。それは学生だけではなく、教員や職員も含めた新しい学びの共同体をどう作っていくのが問われています。

日本で今一番大学改革が進んでいる国立大学は、東京工業大学(東京科学大学)です。初年次教育をしっかりやって、20人ークラスで担任をつけて、毎週読書会をやったり、アーティストや水俣病の患者さんやL G B T Qの人を呼んで講演会を開いたり、グループディスカッションをしたりと、いい授業をしています。でも本人たちに悩みがあります。「8 7 6問題」というもので、学生の8割以上が男子、7割以上が関東出身、6割以上が中高一貫校出身です。中高一貫校出身者の割合は年々上がっています。ディスカッションしても同じような意見しか出てこないのです。

アメリカの大学では、従来型の学力で合格するのは上位2割といわれています。あとは全部多様性を重視して合格とします。アメリカの先進的な大学も全授業アクティブラーニング化されていて、例えば大統領選挙について話し合うときに、ニューヨークやボストンのエリート層はトランプを支持しないので、そういった人たち同士で話しても話し合いが展開していかない。トランプに投票した七千万人の白人貧困層を代表するような学生の意見も必要です。富裕層、中間層、困難家庭、いろいろな地域、民族、宗教、人種、男性女性、L G B T Q、いろいろな人にいてもらわないと授業が活性化しません。ハーバードなどの受験では、困難家庭に育った学生が相当いい成績をとったら、入学させて生活は全部面倒を見てあげます。その代わり、点数はそこそこ

で富裕層の家庭の学生からは高額寄付を受けて、それを基金に困難な学生を受け入れ多様性を保つのです。

今回の日本の大学入試改革も、多様性を持たせるのがポイントでしたが、ほとんど忘れられています。でもこれを進めないと日本の大学は減んでしまいます。実際どうなっていくかという、大学側は、受験勉強では対応できない問題を毎年作るのが難しくなります。高校側は、進路指導が難しくなります。1、2年の受験勉強で詰め込んでも無理で、子どものころから少しずつ多様性のある教育をしておかないと追いつきません。

6. 演劇的手法を使ったコミュニケーション教育の必要性－「身体的文化資本」と「非認知スキル」

社会学では「身体的文化資本」という、フランスのピエール・ブルデューが提唱した概念があります。いわばセンスとかコミュニケーション能力を指しますが、本物に触れることでしか育たないといわれます。「非認知スキル」という教育学から出た言葉もあります。身体的文化資本と重なる部分も多いのですが、非認知スキルは幼稚園、保育園の頃から小学校低学年くらいが一番伸びるといわれています。身体的文化資本は大体12～13歳から19歳くらいが伸びると考えられています。味覚や骨とう品の目利きなど、本物を見抜く能力で体に落とし込んでいくもので、おいしいもの、安全なものを食べさせ続けることによって、まずいもの、危険なものを峻別できるようになる。また美術品など本物を見せ続けることによって、贋物を見抜く能力が培われるというものです。

でもそうだとしたら、演劇、ダンス、ミュージカル、オペラなどのアートに関しては、東京の子どもたちが圧倒的に有利です。私が住んでいる豊岡は、地方都市としては例外的に演劇などに触れる機会が多いですが、東京と普通の地方都市とでは、特に国際水準の芸術鑑賞の機会には10倍以上の差があるのではないのでしょうか。インター

ネットの時代に、知識や情報の地域間格差はなくなるけれども、逆に生に触れられるかどうかで、大きな差がついていくことになります。

現在、演劇やダンスが本格的に学べる高校は日本に70くらいあるのですが、そのうちの6割は東京と神奈川に集中しています。東京、神奈川、大阪、兵庫で8割を占めます。このくらい文化格差は広がっていて、もう一つの格差は経済格差ですが、経済格差が教育格差に直結しているのはご存じの通りです。けれども、文化格差はもっと深刻です。教育の格差は発見されやすいです。「この子は頭がいいのに、家が貧乏なので大学に行けなくてかわいそうだ」とみんな思うし、本当に優秀なら奨学金などで支援することができます。文化格差は発見すらされない。小学生が、自分だけで美術館やコンサートに行くことはありません。豊岡の富裕層意識層の親は、夏休みなどには神戸や京都に車で出かけて、親子ミュージカルや科学館、美術館などに行きます。でも経済的な都合や親の仕事の都合などで、そういったところに出かけない家庭もあります。地方ほど、出かける家庭と出かけない家庭で、スパイラル状に文化格差が広がってしまいます。私は文化格差と言ってきましたが、最近は体験格差という言葉が出てきました。

日本は明治以降150年かけて、教育の地域間格差のない素晴らしい国を作ってきました。おそらく先進国の中で最も教育の地域間格差がない国でしょう。しかし、これが今文化の地域間格差と経済格差の2方向に引っ張られて、子どもの身体的文化資本の格差が広がっています。これが大学入試や就職に直結する時代になってきたということです。地方出身で、大学で大阪や神戸、東京に出てきた人は、大学に入ってから演劇やダンスなどに触れて、都会はやっぱりすごいと思ったものですが、大学入試段階で文化資本の面が問われてしまったら、もう地方の子にはチャンスがなくなってしまうのです。

大学入試改革はやらないと日本の大学は滅びます。多様性を持たせたい。でもそのためには多様な試験をやらなくてははいけません。この議論が始まった2013年ごろから、

いろいろなシンポジウムに呼ばれました。進学校の進路指導の先生から、まず変わるわけないと言われました。でもご承知の通り、今は受験生の半数以上は年内入試で入っています。それから、努力が報われないというご指摘もありました。確かに、今までの偏差値中心の試験は努力が比較的反映しやすいので、その点において平等な試験です。でも結果として平等になっていません。東大も京大も阪大も、親の年収は一千万を超えています。大学に入る前には中高一貫校に入らないといけないと言われている。中高一貫校に入れるには何百万から一千万以上かかります。これはちっとも平等ではないのではないのでしょうか。中には例外的に、困難家庭に育っても、努力だけで京大や東大に入る子もいます。僕の大学でも、親が生活保護を受けているので家計を切り離しているという子がいました。

本当はこの大学入試改革の中で、国公立でも、地域枠や離島枠、過疎地枠というのでも検討して、多様性を保つ努力をしなくてははいけません。ただし、多様性を持たせようとする試験にすると、どうしても身体的文化資本が問われる試験になりがちで、都会の子がまた有利になってしまいます。地方ほど教育政策と文化政策を連動させて、子どもたち一人ひとりの身体的文化資本が育つような教育に、予算を掛けなければいけないのではないのでしょうか。

ではなぜコミュニケーション教育が必要になっているのでしょうか。今から話すのは浜野隆先生(お茶の水女子大学)の「全国学力・学習状況調査を活用した専門的な課題分析に関する調査研究」です。平成29年度の学力テストを受けた児童生徒の家庭環境を調べたものです。SES(家庭の社会経済的背景、保護者に対する調査結果から家庭所得、父学歴、母学歴の三変数による合成指標で、これを四等分して分析)が高い家庭の子どもほど、学力テストの成績がいいのは前回の調査でもわかっていましたが、細かい調査をするとばらつきが意外にあります。最近教育界でいろいろな使い方をされる非認知スキルという言葉ですが、今日ここでは学力テストや知能指数(IQ)のような数字に表されるもの以外の能力を、全部非認知スキルと定義させてください。自制心、意欲、忍耐力、好奇心などいろいろとあります。子どもの学力と非認知スキルは緩やかな相関性があるが、非認知スキルとSESの相関性はないということで、子ども

は等しくばらばらに持っていることがわかりました。非認知スキルを高めると、学力を一定程度上げる可能性があるということです。特に困難家庭で成績のいい子が特定の非認知スキルを持っていることが証明できれば、ここをターゲットにすれば成績を上げられるのではないかと考えられます。追跡調査をしたところ、困難家庭だが成績がいい子にはいくつか特徴があることがわかります。

- ◎ものごとを最後までやり遂げて、うれしかったことがある。
- ◎難しいことでも、失敗を恐れないで挑戦している。
- ◎自分には、良いところがあると思う。
- ◎友達の前で自分の考えや意見を発表することは得意だ。
- ◎友達と話し合うとき、友達の話や意見を最後まで聞くことができる。
- ◎友達と話し合うとき、友達の考えを受け止めて、自分の考えを持つことができる。
- ◎学級会などの話し合いの活動で、自分とは異なる意見や少数意見のよさを生かしたり、折り合いをつけたりして話し合い、意見をまとめている。
- ◎学級みんなで協力して何かをやり遂げ、うれしかったことがある。

演劇的手法を使ったコミュニケーション教育が狙っているのはまさにこういうところ
です。実際に豊岡市では、例えば全国学力・学習状況調査では、中学3年生の85%が
「話し合いが好き」と答えています。導入当初の8年前は全国平均より下だったの
が、急速に伸びました。非認知スキルは、もともとしつけが大事という面があると保
守派が注目したのですが、集中力をつけるために正座してドリルを30分やるというの
は効果がなくて、それよりもみんなで何かをやって達成感がある、拍手を浴びてうれ
しいというようなサイクルが大事だと考えられます。

これは別のデータで、浜野先生の統計ですが、小学6年生の学力テスト上位25%層と下位25%層の家庭環境を比べた表です。1番は「家には本がたくさんある」24.6ポイント、「子どもが小さいころ絵本の読み聞かせをした」17.9ポイント。「博物館や美術館に連れて行った」15.9ポイント、これは「子どもに毎日朝食を食べさせる」よりも上です。同じ所得層でも、美術館、博物館に連れて行っている家庭とそうでない家庭とで、有意な差があるということです。ショッキングなのは「子どもの勉強を見て教えている」0.9ポイント、算数に至ってはマイナス1.1ポイント。教えた方がいいと思うけれども、教え方が悪いと嫌いになってしまうということだと思います。「英語や外国の文化に触れるよう意識している」17.5ポイント。浜野先生の別の統計で、幼稚園時代に英語の塾に通っていた子の中学校での英語の成績は、全く相関性がないというデータもあります。早期教育はリスクもあるということです。

子どもは好奇心を持てば自分から学ぶのです。先ほどの表の設問「家には本がたくさんある」という中の本は、児童書ではなく親の蔵書です。親の蔵書と子どもの学力が相関性が高いと言われます。難しい本がいいのです。子どもは親がどんな本を読んでいるか知りたがりです。博物館、美術館に行くのも、そこで何かを学ぶというよりは、不思議に出会うので家に帰って図鑑を開くということです。こういう子どもたちは困難な家庭に育っても成績がいいのです。

学び合いとは何でしょうか。子どもは教員の言うことは聞いていなくて、それよりも、友達の成功や友達の発言から、より大きな影響を受けます。これも有名な教育統計ですが、一方的に授業をすると長期記憶に残るのは5%くらい、プリントを使うと10%、AV機器を使うと20%、実験をすると30%、ディスカッションを入れると50%、体験学習だと75%、人に教えると90%です。つまり、隣の子にこっそり教えてあげる子はその子の優しさから純粹に教えてあげるのですが、その教えるという行為が、その子の脳にフィードバックして長期記憶につながっているのです。今6割の大学は定員割れですから、昭和の時代の受験に強い子、競争に強い子を育てるよりも、隣の子にこっそり教えてあげられる心の優しい子を作りませんか。緘黙の子に居場所を

作ってあげられる子を作りませんか。その方がクラス全体の成績も効率よく上がります。一番の効率は学び合いです。タブレットで効率よく教えようとしても限界があります。子どもたち同士の学び合いの力を引き出すのが教員の役割ではないでしょうか。

非認知スキルは、広げたハンカチのイメージで説明します。ある項目が伸びると全体が伸びると言われています。クラス全体で集中力をつけようとか好奇心を生もうとかではなくて、一人の子の非認知スキルを伸ばすと周りも伸びます。非認知スキルの中でもぜひつけたい力の一つが目標達成能力です。自己効力感ともいわれます。従来の学力テストだと、できたかできないかしか判定できませんが、できないとできるの間の「できるようになってきた」をとらえて褒めてあげてほしいです。

それから協働性です。他者への関心、共感力とか思いやりは確かに大事ですが、きょうだいが少なかったり、地域社会との関わりがなかったりが原因で、他者への関心そのものがもともと弱い子がいます。こういうものを持たせてあげることが必要なのではないのでしょうか。

それから、最近は自己肯定感よりも自己有用感という言葉が良く聞かれるようになりました。つまり他人から必要とされることです。これも演劇の強みです。その子がいないと本番ができないのでどうしても君が必要だと言いやすく、自己有用感を持たせることにつながると思います。また個人的には好奇心が大事で、すべての出発点になると思います。

学力とは学ぶ力です。学んだ結果ではありません。大学入試も学んだ力を測る試験から、学ぶ力を測る試験に変わっています。だから学ぶ力をつけることが大事で、そう考えると学力は、文科省は知識や技能を土台にしてと言いますが、実は主体性・多様性・協働性が土台なのではないのでしょうか。反転授業という言葉があります。実践している先生もいるかもしれませんが、家でタブレットで予習して、学校ではアクティ

ブラーニングということです。これは何が反転したかを抑えておく必要があります。今までは教員や学校が持っていた権威、権力が反転したのです。これまでは教員が知識や情報を抱えていたから、子どもは学校に来ざるを得なかったが、今は知識や情報はいつでもどこでも得られるようになりました。しかもコロナでそれが明らかになりました。あの全国一斉休校措置の時、先生には厳しい言い方ですが、多くの子どもたちは、こんな授業なら学校に行かなくてもいいと思ったでしょう。しかし違います。学校でしかできないこと、少なくとも学校の方が圧倒的に得意なことがあります。主体性・多様性・協働性を伸ばす方です。反復とか採点はタブレットに任せて、学校は学校でしかできないことをやっていけばいいのです。

7. 対話を生み出す授業－フィクションの持つ力、「シンパシーからエンパシー」へ

最後に演題の話に戻ります。唐突に思われるかもしれませんが、フランス革命の目的は自由・平等・博愛でした。自由と平等は矛盾します。自由を重んじすぎると格差が起きるし、平等を重んじすぎると個人の人権が抑圧されてしまいます。そこで博愛という、柔らかい印象の言葉を入れたところがミソだと思います。

私は、「主体的対話的で深い学び」ではなく「主体的対話的で愛のある学び」にしたかどうかと提案しているお話は先ほどしましたが、もう一つ、「シンパシーからエンパシーへ」と提案しています。シンパシーはかわいそうな人がいた時に心から同情する気持ちです。エンパシーは、異なる価値観、異なる文化背景を持った人の行動や考え方を理解しようとする態度や技術のことを指します。わかりやすい例としては、トランプ次期大統領の支持者が、4年前に国会議事堂に乱入しました。私たちはあの乱暴を全く許せないけれども、トランプさんに投票した7千万人の白人貧困層の気持ちについては理解に努めないといけない。「私はトランプさんに投票しないけれどもあなたがトランプさんに投票した気持ちはわかります」というのがエンパシーです。同意はしないけれども、理解に努めるのが多文化共生型教育の基本です。

もう一つ、対話と会話をきちんと区別することが大事ではないかと思います。英語でははっきりとした違いがありますが、日本語では辞書的にも語義がおかしいし、理解されにくい言葉となっています。私なりの定義としては、会話は親しい人同士のおしゃべり、対話は知らない人同士の情報の交換、あるいは知ってる人同士でも価値観が異なるときのすり合わせに使います。

20年以上前にNHKが全国の小学校教員対象に調査をしたとき、「子どもたちはおしゃべりは得意だが話し合いが苦手」という結果が出ています。まさにここに問題があるのです。この問題の本質をとらえないと「主体的対話的で深い学び」にはならないと思います。日本ではほぼ均一の民族・文化・言語という幻想の中で育ってきましたので、大体同じような価値観の人が何となくうまくコミュニケーションをしてきました。これを分かり合う文化、察しあう文化と呼んでいます。ヨーロッパは、自分が何者で、何を愛し、何を憎み、どんな能力を持って社会に貢献しなくてはならないかを、きちんと説明できることが当然求められます。これは文化の違いなので善し悪しではありませんが、実際に日本の日常生活では、対話の必要はほとんど起こらない。少なくとも日本の教室内では話し合いをさせても、教員が持っているであろう正解を当てるとなようなディスカッションになってしまい、なかなか対話になりません。ヨーロッパでは、肌の色も出自も違うので、当然対話せざるを得なくなります。日本では、先ほどの東工大の話のときも申し上げた通り、均質な子どもたちが集められているので対話が起こりません。自然状態では会話のままで対話にならないので、だからこそ対話を生み出す授業、対話を仕掛ける授業が必要になってきます。そこに、私は、フィクションの力が必要ではないかと思います。先ほどの本四架橋の問題のように、強いフィクションの力がないと、子ども達に対話は起こりません。単純に道德の教材を持ってきて話し合いなさいと言っても答えは決まっています。

ここに、演劇的手法の大きな役割があると思います。「シンパシーからエンパシーへ」とは、私は「同情から共感へ」「同一性から共有性へ」と訳してきました。そうであれば、「主体的対話的で共感のある学び」になるのではないかと。主体性が強すぎても対話にならないし、対話性が強すぎても同調圧力でそれもいいね、これもいいね

で終わってしまいます。時々講演会などでこういう話をすると、金子みすゞですね、『みんなちがってみんないい』ですね、と言われますが、みんな違って大変だということを知りたいのです。みんな違ってみんないいなら教育の必要などありません。「みんないい」で済んできたのは違いの範囲が極めて限定的だからです。

さらに、先生方はよく「とことん話し合え」と言いますが、とことん話し合って解決するのは、話し合えば解決する課題しか与えられていないからです。例えばイスラム教徒とキリスト教徒が話し合っても、考えを変えることはできません。同化はできないからとりあえずどうにかする力が必要です。これからの日本の子ども達に必要なのは、この、とりあえずどうにかする力です。20年前にはこのようなことを言っても無理と言われました。でも今は、一定時間内に合意を形成する能力は、文科省が求める力の一つとなっています。

先ほど話した、演劇授業の終わりによくこういう話をします。

「今日3時間演劇授業をやって、みんな楽しくできたね。でも難しいところもあったね。何より、正解がないというのが難しかったんじゃない。みんな一人ひとりが楽しいと思うこと、好きなことを他の人が変えられないし、説得もできないね。メロン好きな人をイチゴ好きに変えられないし、イチゴ好きな人をメロン好きに変えられない。でもきょうだいがいて、お父さんお母さんから3時のおやつ何にするって聞かれて、きょうだいでケンカしてたらどっちも出なくなっちゃうよね。3時のおやつだったら、お父さんお母さんが買い物に行く1時とか1時半とかまでに話し合って結論を出して、伝えるところまでやらなきゃいけないね。今日メロンでいいから明日イチゴにしたらとか、今日僕我慢してイチゴでいいから明日メロン多めにしたらとか、きょうだい仲良くするからメロンとイチゴ両方出してとかね。メロン大嫌いとかイチゴ食べるなら死んだほうがましとかいう人がいたらしょうがないけど、あんまりいないよね。どっちかは出たほうがいいよね。明日も出るんだし。話し合って決めて伝えるよね。伝え方の工夫も必要だよ。お兄ちゃんお姉ちゃんのほうがうまく伝えられるかもしれない

いけど、お父さんお母さんにとっては弟妹のほうがかわいいから、こいつに言わせようっていう戦略も必要だね。これが話し合うということです。なぜなら社会に出たら、自分のやりたいことが100%通るなんてことのほうがまれで、それよりも相手が何を望んでいるかを受け入れてあげると、自分の意見も通りやすくなるよ。これが話し合う、折り合いをつけるということなんだよ。」

こういったことを学ばせるのに、多少、我田引水になりますが、やはり演劇が非常に強い力を発揮するのではないかということです。

明星学園は、伝統的に演劇を続けてきているようですから、それをアップデートしていただき、また他の学校の先生方も、演劇そのものをやってくれというお願いではなく、演劇、フィクションの力を使って、授業を面白く進める工夫をしていただければと思います。

質疑応答

Q1. 先ほどのお話で、大学でも全入ということですが、やはり評価方法が難しい。表現活動のようなものはパフォーマンス評価であったり、ルーブリック評価という形があるのですが、それを作るにはどうしたらいいのでしょうか。

A. 評価にはいくつか答えがあると思いますが、選抜でなく授業であれば、評価をしないというのも一つの手です。アメリカでは今パスorフェイルといって、単位を出すか出さないかだけで、グレードをつけない科目も増えてきています。また、学生がグレードをつけるかつかないかを選べる科目もあります。そういうことも考えてもいいかもしれません。道徳に点数をつけるかどうか問題になりますが、それと同じで点数をつけられるのかどうかということです。それから、私が大学で評価をするときによく使うのは相互評価です。学生たちに点数までつけさせます。それもルーブリックで、ABCDでとか、成績分布も指定してやらせます。大学生は結構上手にやります。

それだけではなく、表現教育での相互評価は、お互いのいいところを褒め合ったり、先生方は避けがちですが、小学生でも1番を選ぶとかベスト3を選ぶとかもやっています。子どもたちはちゃんとやるのでそんなことで傷つかないし、負けたら悔しいと思ってまた頑張ります。ループリックについてはありきたりですが、毎年やってみて、先生方の意見を聞いて少しずつ変えています。正解はないのだと思います。

あと、定性的なことでは、全国のいろいろな大学の入試のお手伝いをしてきましたが、当然面接官の先生方は最初は不安です。「だいたい演劇もやったことないのに評価できません」と言われますが、その時に私が良く言うのは、「これは演劇を見る試験じゃなくて、ディスカッションを見る試験です。自分のゼミに取りたい学生を選んでください。ゼミには優秀な子が欲しいが、コンパの準備をちゃんとやる学生とか、みんながなぜか相談事を持ちかけやすい学生とか、いろいろな人がいた方がゼミとして豊かになるでしょう。だからゼミの視点で、この子うちのゼミに来てほしいという人を取ってください。」ということですが、それにしても難しいですね。これまでのような学力試験の問題作成でも、本当にそれが子どもたちの学力を測れる試験になっているかどうかわかりませんよね。正解はなくて、ちょっとずついいものを作るしかないのではないかと思います。

Q2. 横須賀の公立小学校の教師です。身体的文化資本がかなり厳しい子もたくさんいます。大学入試で身体的文化資本とか、体験学習とかの資質を問われるようになると、競争原理として、おそらく高校が減びることになるのではないかと思います。その資質が充実した学校に入るためには中学校、小学校と、求められるステージが下がってくると思われます。公立小学校として、身体的文化資本的な能力や考え方とかを求められたときに、解決策としては非認知スキルだというお話でした。非認知スキルは大切な要素だが、やさしさとか我慢強さなどは個人の気質に関わってくるので、指導して伸ばすものでもないという、国立教育政策研究所のレポートもあります。その点は、教員として、非認知スキルを伸びないものとして教育していくのか、どうお考えですか。もう一点、演劇が教科化された未来があるとして、教育の悪いところ

で、またその系統性などが出てくると思います。そうすると、せっかく熱中していた子どもたちが興味を失ってしまいそうです。教科化されたときに考える、あるいは教科化とは無関係でも、理想の演劇教育についてお考えはありますか。

A 後の方の質問へのお答えとして、教育というのは常にトレードオフなので、全部を満足させることはできないと思います。教科化することの善し悪しを計ると、僕は教科化した方がいいと思いますが、当然リスクもあります。ちょっとずつ良くしていくしかない。音楽教育や美術教育でも、もう教科をやめようという先生もいますが、オールオアナッシングで考えない方がいいということだと思います。

前半の質問に対しては、思いやりとか我慢強さなどは大事とはいえ、伸ばせる性質のものでないので、他者への関心とか自己有用感とか、伸ばしやすいものを伸ばすということですね。例えば豊岡市は、すごくきちんと教育統計もとっているのですが、演劇教育は他の科目に比べて、自己効力感などが伸びるというデータが出ています。公立の強みもあります。緘黙の子に場所を作れるのは公立が有利です。さらに、地方の強みは自然に囲まれているという不確定さがあることです。都心部に行けば行くほど情報化が進んで、不確定性が弱くなってしまいます。地方でも公立でも、強みを生かすのが大事です。さらに、教育全体の改革は国で考えないといけませんね。豊岡但馬では、大学が中心になって、もう高校入試をやめたらどうかという議論が起こっています。高校入試をやめると、相当みんな楽になりますね。そういうことはドラスティックに起こっていくべきことだと思います。